

イギリス新教育運動期における「時間割」と教師の専門性  
—クロノロジカルな時間をめぐる史的ダイナミズム—

Transition in ‘time-tables’ and teacher’s professionalism; the dynamic challenge to  
‘chronological time’ in *the New Education Movement* in England

山崎 洋子\*

YAMASAKI Yoko\*

**Abstract**

In this article I try to clarify historical developments and challenges to the time-table conceived as a matrix of ‘chronological time’, of days and hours. This challenge occurred during *the New Education Movement* in England, a distinctive aspect of how teachers tried to acquire professional autonomy for their work and professional status. As is known, the New Education Movement in England unfolded a philosophy of education wherein “it is widely held that children should be allowed, as far as possible, to proceed at their own pace,” as eventually acknowledged in the official Hadow Report, *The Primary School* published by the British government in 1931. As the conclusion to a process of transition in time-tables over a period of fifty years, three critical phases have been identified: (a) ‘the demand for free time-tabling’ as in the curriculum of an independent foundation, King Alfred School, Hampstead, (1898-) drawn up by the educationist J. J. Findlay in deliberate contrast to the strict rules and time-disciplines of the British government's *Education Code of 1870* and *New Code of 1893*; (b) ‘the creation of varied time-tables’ to maintain both efficiency and freedom as evidenced by one of the Board of Education's Special Reports on Educational Subjects, Vol. 6, *Preparatory Schools for Boys: Their Place in English Secondary Education* in 1900 and the book *School Organisation* written by S. E. Bray, a school inspector for London County Council, in 1905; (c) ‘the paradoxical expanding of applied free time-tables’ like developing a Record of Work for understanding children's progress by the headteacher E. F. O’Neill, and the Dalton plan within state schools, as introduced and advocated by the progressive teacher A. J. Lynch. In the dynamism of these three phases, four oppositional features may be identified; strictness (predetermined timetable to be rigidly followed), diversification (various possibilities but within the framework of a set timetable), flexibility (a timetable that can be adapted and changed according to need as the day progresses), and spontaneity (really the absence of a timetable, allowing anything to happen). From this progressive period in the history of the profession we might be inspired to learn that teachers should reject passive acceptance of rules and customs, and rather develop more engagement and fulfillment through radical reflection, developing their personal philosophy and art of pedagogy and education.

1. はじめに

社会が加速度的に変化していく今日、教師をめぐる問題状況については、国内外を問わず多忙感や徒労感、それに伴う疲労感、意欲の消失など枚挙に遑がない状況が続いている。このような問題状況は、総じて、合理的な時間管理を余儀なくさせるがゆえに、学校の時間割へのアプローチは国際的関心事の一つとなっている。だが、それは今に始まったことではない。というのも、たとえばイギリスでは一般大衆の子どもたちを教える教師

(teacher) という職業が誕生した 19 世紀の中頃から、時間管理は教師の技能のひとつに数えられ、その確かさが専門性を象徴していたからである<sup>1</sup>。もちろん、教育内容が単一あるいは一義的である場合には、教師の専門性は教授技術などに限定する形で顕在化する傾向にある<sup>2</sup>。

しかし、教師の専門性の意味内容が変わる時期が到来する<sup>3</sup>。それがいわゆる新教育運動期である。このことはイギリスの新教育運動 (New Ideals in Education Movement, New Education Movement) が展開された 19 世

\* 武庫川女子大学 (Mukogawa Women's University)

紀末から 1920 年代末までを考察対象とすることによって明らかになる。ただし、今もって、多くの要素を孕んだ「教師の専門性」については、それが文脈依存的な状況をもっているがゆえに蓋然的であると言わざるを得ないという現実もある。それにもかかわらず、新教育運動期が教師の専門性の意味内容の変化した時期と捉えうるのは、その時期にカリキュラムや教育方法の改革が模索され、それが教師の自律性の基盤と枠組みの形成を一步前進させたからであり<sup>4</sup>、またその影響がハドー報告書(1931)やプラウデン報告書(1967)など、イギリスの中央政府審議会報告書にも反映されたという史実があるからである。

教師の自律性獲得への要求が歴史的不可避性によるものなのか、あるいは教師集団による内発的な変革意識によるものなのかは確定しがたいが、現実には、新しい教育方法や新しい「教師-子ども」関係の構築、さらにはカリキュラム改革を求める運動は、それまでの一斉指導やレシテーション中心のカリキュラムを変革していく強力なエネルギーをもっていたのであり<sup>5</sup>、その思潮は 20 世紀の 1970 年代まで続くプラウデン旋風にも影響を与えることになる歴史事象であった<sup>6</sup>。

そこで本論では、教師の専門的な能力、いわば教師の専門性を具体的に反映させることができ、その意味で教師の自律性の意味内容の考察において有為だと推察される「時間割」に着目し、とりわけ新教育運動期の「時間割」の変遷の諸相と特徴を描出する。ここでいう時間割とは、'Time Table', 'Timetabling', 'Time allocation', 'Time allotment', 'Scheduling' と英語表記される事象を指し、それは教師の行為内容と学校での生活時間を、経験的な時間ではなく計量的な時間、すなわちクロノロジカルな時間に対応させ、カリキュラムの効率的実行を目的としたものである。

そもそも、教育学的には、「時間割」編成は教育すること、つまり一連の教育行為を教科内容別に切り分けて時間枠に収めるという方法を必要とし、それは平等の時間を同一年齢の者に与えるという点で一定の平等性を保障するものとみなされた。しかし他方で、子どもの興味や関心を尊重しつつ、時間枠に縛られずに多様な個人の能力を尊重し、それらを個性豊かに発達させることも教育行為には求められている。もちろんそこには、近代的な時間規律を学校で教えることに繋がる教師の時間厳守の態度様式が横たわっている。授業の開始と終了を定刻どおりにすることや遅刻という考え方に基づいた教師の態度様式は、近代的な時間感覚を有した労働者形成を目的とすることと同義でもあったのである<sup>7</sup>。

こうした多様な要求を突きつけられた教師自身が自ら抱えるジレンマや苦悩を昇華させつつ、専門職としていかに日々の教育行為にその理想を具現するかということ

は、格子状に書き込まれた静的な「時間割」には明確に現れてこないという見解もある。しかし、新教育運動に参画して得られた教師の知見、すなわち実践的知見は、法令によって規定された「時間割」をも柔軟に取り扱うことを可能にする「教師の専門性」の形成に向けた教職の道を敷いたのであり<sup>8</sup>、そのことは、イギリスの新教育運動家がパーカースト(H. Parkhurst, 1886-1973)の考案したドルトン・プランを個別時間割として、スムーズに受容をする基盤ともなったのである。なお、本論では「近代教育の自己省察」の手がかりを得るため、「時間割」という格子状の枠には顕在化してこないような何らかの特徴的な考え方が生まれたのか否か、あるいは「定量的な時間」のなかに、「生きられた実存的な時間」が組み込まれていたのか否かということも視野に入れながら、時間割をめぐるダイナミズムの描出にアプローチする。

## 2. 「時間割」編成にかかわるカリキュラム論—イギリス新教育運動第 I 期<sup>9</sup>—

そもそも、イギリスでは、1870 年基礎教育法以前には、教育局はどの地方の学校を抑制する力も掌握しておらず<sup>10</sup>、「時間割」への公的強制は存在しなかった。しかし、1870 年基礎教育法(フォースター教育法)[7 項(2)]によって、「時間割」の中に宗教についての時間を明記することと「時間割」を教室の壁に貼ることが義務づけられることになる<sup>11</sup>。また後の 1893 年教育規程(New code, 1893)<sup>12</sup>では、毎日 5 時間あるいは 5 時間半を 5 日間学ぶという時間規程や時間配分の例が示されたのである<sup>13</sup>。このような公教育制度のあり方への批判を内包し、旧態依然としたカリキュラムや教育方法を改革するべく生起し展開された新教育運動は、1870 年から 1902 年までを第 I 期、1903 年から 1918 年までを第 II 期、1919 年から 1920 年代末までを第 III 期と、分けて捉えることができる<sup>14</sup>。

多様なカリキュラムや権威主義的ではない教育関係の創造といった新教育運動のモチーフは、教師自身のマネージメントや教授技術の向上など、教育方法上のニーズだけでなく、子どもをどのように理解するか、子どもの自由をどのように保障し、どのように子どもの個性を伸展させ、どのように全人的な成長や発達を図るか、という教師自身に内在するいわば教育理想のニーズを顕在化させ先鋭化させていった。その推進役を新教育運動第 I 世代の一人として担ったのが、フィンドレイ(J. J. Findlay, 1860-1940)である。

既に筆者は「時間割」編成に影響を及ぼしたフィンドレイ考案のカリキュラム、すなわち新学校(New Schools)の一つであるキングアルフレッド校(King Alfred School, 1898-)のカリキュラム(1897 年 10 月)に三つの特徴があることを解明した。その特徴は、①ヘルバルト主義と

ペスタロッチに基づくフレーベル主義の教育思想を反映していること、②学習内容を A (人文), B (自然と知識), C (スピーチと音楽における表現技能), D (描写技能とその他の手工芸), E (抽象科学と数, 形, 言語), F (レクリエーション) の 6 群に分類し, それらを領域として捉え, 9 年間を見通したスコープとシーケンスの考えを採用していること, ③レクリエーションという教育内容が出現しているということであった<sup>15</sup>。また, 第 2 の特徴, 「学習内容の 6 領域」論の視点が, その後の学校教育において「柔軟な『時間割』編成へのアプローチの保障」につながる道を敷いた, ということを指摘した<sup>16</sup>。当然のことながら, 聖書と 3R's を中心としたカリキュラムを教師主導で一斉に教授するのではなく, 子どもの自由や子どもの個性を重視し, 全人的な人間形成を目指すのならば, 限られた時間や細切れの時間枠で教育活動を展開することは不可能である。それゆえ, 不可避的に, あるいは必然的に, 柔軟な「時間割」が求められた, と解することもできる。

では, 実際に, 「時間割」編成においてはどのように柔軟になったのであろうか, どれだけ教師に自由度が保障されたのであろうか。次の項では, 新教育運動第 II 期にどのような「時間割」編成論が出現したかを明らかにし, その特徴を描出することにしたい。

### 3. 多様なカリキュラムと「時間割」の出現<sup>17</sup>—弾力化／多様化する新教育運動第 II 期—

#### (1) 私立校のカリキュラムと「時間割」

旧態依然とした教育への批判は, 私立の新興のいわゆる新学校を中心に展開された。それは新学校創設というパイオニア的な行動に始まるが, その影響は新学校ではない従前のプレップ・スクール (Preparatory Schools) にも及んでいった。そのことは, 中央政府の教育院諮問機関が特別に実施した調査報告書 (1900 年に刊行) に記載されている学校のカリキュラムと時間配分に現れている。ここでは二つの学校, すなわち 4 歳児から 7 歳児までを対象とする A 校 (School A, Kindergarten-Four to Seven Years (Boys and Girls) (Table 1-A, 1-B, 1-C, 1-D) と 6 歳児から 9 歳児までを対象とする B 校 (School B, Upper Division-Six to Nine Years (Boys and Girls) (Table 2-Aa, 2-Ab, 2-B) のカリキュラムと時間配分を考察することにしたい。

では, これらの学校の「時間割」は具体的にどのようなになっていたのであろうか。本論末にそれらを掲載しているが, まず, A 幼稚園のカリキュラム (Table 1-A, 1-B, 1-C) を概観すれば, そこでは進歩的な教育内容, つまり手作業や身体運動などの体験的な教育内容が取り入れられている。その意味で, 新教育という理想は私立の学校に影響を及ぼしていったことがわかる。しかし, A 幼稚園

には, 子どもをグループ化して教科ごとに移動しながら学習していくセッティング概念が残っていること<sup>18</sup>, また多様なカリキュラムの採用ゆえに細切れの時間配分がなされ格子状の時間枠が出現していること, 宗教的自由の態度が見られないことなど, 後の新教育運動において強調される自由, 個性, 合科といった諸理念への考慮は脆弱である。しかも, Table 1-D としてまとめた「時間割」の比較をみていくと, セッティング A の頭脳学習と身体学習は 6 対 4 の割合であり, 前者が週に 2 時間 50 分多いのに対して, セッティング C では頭脳学習と身体学習の割合は 5 対 5 であり, 前者が週に 20 分間多だけである。それゆえ, セッティングという呼称が, 能力別のグループ編成であるストリーミングと実義的に用いられていることがわかる。

ところが, B 校の上級学年や低学年の「時間割」をみればセッティングは採用されておらず (Table 2-Aa, 2-Ab, 2-B), 頭脳学習と身体学習の割合がほぼ同じになっており (Table 2-C), むしろ週あたりの時間数では 30 分間も身体的な学習が増えている。この実態からは, 低年齢の子どもたちよりも高年齢の子どもたちに新教育的な理念が採用されているということ, すなわち完全な逆転現象を呈しているということがわかる。具体的には, 後者に対しては, 美術学習, ガーデニング, 自然学習など, 新教育運動が掲げた新しい学習内容が取り入れられており, しかも木曜日の午後には別途, 45 分間の特別活動としてガーデニングの時間が確保されているのである。一事例ではあるにせよ, ここにも新教育運動の思想的影響が鮮明に現れている。これを敷衍するならば, 日本でしばしば言われる主張, つまり「発達の未分化」ゆえの「合科的, 総合的な学習の必要性」, といった視点は意味をなさないことになる。

また, 「極めて貧困な地域の最も興味深い時間割」 (Table 3-A, 3-B) には, 二部制の学校でありながら, 芸術や遊び (休憩) が入っており, そこでも新教育運動の影響を窺い知ることができる。

以上のことを踏まえて時間割の全体的特徴を描出するならば, ①宗教的モチーフと自由 (身体, 精神) のモチーフが併存していること, ②多様な教育内容に対応するための教師の増員配置の必要性が顕在化していること, ③子どもにとって午後の自由な生活時間であったものが教師の管理下におかれたこと, ④多様な新教育的な科目の出現とこのことへの対応として格子状の「時間割」が登場してきたこと, といった点をあげることができる。これを端的に要約するならば, 多様なカリキュラムの出現によって, 細切れの時間配分による学級経営の方法が出現し, 同時に午後の時間枠までもが教師の関与する時間帯になっている, という実態が浮かび上がってくるのである。

ここに様々な意味での教師のジレンマが立ち現れてくる。この内実を具体的にみていくために、以下では先に挙げたフィンドレイの理論を取り上げることにしたい。

## (2) 効率性／合理性に対するジレンマと妥協—フィンドレイの「時間割」観<sup>19</sup>—

新教育運動期における旧教育への批判は、教師自らの創造した多様な教育内容と教育方法を生みだした。それは国家の強制する硬直的な教育内容や教育方法を乗り越える観点と方途を導き出したという点で、画期的であったといえる。だが、そうした要求がまた逆にジレンマを生むことも軽視しがたい点である。それは、当然のことながら、限られた時間内に多様な教育内容を要請することは、カリキュラムの過密化と共に、さらに教師自身の知識や教養の幅、また別の対応の必要性を生むからである。そのことは新教育運動を先導したフィンドレイの著作『学級教授の原理 (Principles of Class Teaching)』(1902)からも明らかになる。なぜなら、デューイ (J. Dewey, 1859-1952) の教育思想に影響された彼は、「個人としての子ども」という考えを鮮明に出していたからである。

「一つの教室は大きいかもしれないが、それを取り扱う方法は、一人ひとりの子どもについての我々の知識に基づいている。我々の教育において、『単位(unit)』は、学校ではなく、またクラスでもなく、『一人の生徒 (the single pupil)』である」<sup>20</sup>。

このように個人として子どもを理解し捉えようとする視点、つまり個性化、個別化の方法原理は、新教育を代表する思想である。言い換えれば、教育対象への迫り方は、新教育運動を唱導していたフィンドレイならではの観点である。では、教育の内容、すなわちカリキュラムについてはどうであろうか。もちろんカリキュラムに関しても、彼は新教育思想の特徴を鮮明に出してその重要性について言明している。それらは、彼がキングアルフレッド校のカリキュラム編成において重視した、レクリエーションの導入、新教育的科目の導入、教育内容の6群分類の提唱となって現れていた。しかも、彼は同時に学習時間の延長や拡大についても強調しているのである。

「6歳までは3時間以上長く学校にいることはない。……レクリエーションを取り入れるのを認めるため、平均25分間の長さの6つの授業時間枠が与えられる。授業の平均の長さは、今や30分間に拡大されてよいだろう。もし、最大限に使える何分かを加えた授業にうまく時間配分できるなら、子どもは学校でこれら以外に別に午前中30分間い

てもよいだろう。しかし、よりよい計画は、その日の昼間の長い時間に子どもを解放し、そして、午後に1時間か1時間余りだけでもよいので、再び子どもに授業を受けさせることである」<sup>21</sup>。

「子どもは宿題を課されるほどの年齢ではない。しかし、読み方(……)や書き方の技能を実践する際には静かな個別の学習が有益であり、(平易な)足し算を行う際には、家に持ち帰る本や宿題用紙を与える代わりに、授業時間を午後に特別に30分間延長したほうがよい」<sup>22</sup>。

「1日当たりの子どもの時間の内、4時間半を学校に割り当てて考えてみよう。運動場にいる30分間を残すと、平均30分間の長さが8コマ分それぞれの日にあることになる。これらにはおよそ6群(group)が配分され、毎日、次の各群の授業がおかれることになる。(1)物語と歌 (Story and Song), (2)自然学習 (Nature Study), (3)かず (Number), (4)言語、例えば読みと書き (Language, i.e. Reading and Writing), (5)芸術と表現 (Arts of Representation), (6)オキュペーション (Occupations) である。第7群は、黙想 (Silence) への準備が求められる。これは毎日の授業では除かれる。6群の内いくつかは、より多くの時間が必要であり、とりわけ自然学習 (Nature Study) とオキュペーションはそうである。これらには、息抜きのための方途が求められる。時々、子どもたちは散歩をしたり博物館を訪問したりしている」<sup>23</sup>。

「生徒の頭脳の集中現象の継続 (the continuity of intensive impression) のために、たとえ数分間でも、意味ある練習が毎日要求されている、という一般原則が見て取れる必要がある。……6群の授業が全て週の『時間割』に位置づけられるべきである」<sup>24</sup>。

以上のフィンドレイの考えに従うならば、一日の学校生活に相当する4時間半の内、30分間を外でのレクリエーションや休息に使い、他方で、6群の内容を各30分間に分割するという古い考え方も踏襲されている。ただ、数分間でも集中的に継続的な学習をすること、自然学習とオキュペーションに30分以上の時間を用いること、これらについては新教育が求めた新しい内容を具体化する提言として極めて画期的なもの、と捉えることができる。なぜなら、ここには、毎日のトレーニングと記憶を要する旧教育的内容、すなわち「読み、書き、計算」(3R's)などと、新教育が掲げる学習活動、すなわち自然のなか

での学習活動や作業などをバランスよく採用しようとする姿勢が共に認められるからである。ただこれは、新教育が掲げる諸理念を限られた時間のなかで実現しようとする際の妥協、あるいは新教育運動が必然的に抱えざるを得なかったジレンマへの対応、と捉えることもできよう。

しかも、フィンドレイのこの折衷姿勢は、「新教育運動第二世代」<sup>25</sup>が問題視した宗教に対しても現れている。なぜなら、彼は教科の再編や統合といった新教育運動の志向したカリキュラム編成を称揚する一方で、新教育運動第二世代が求めた宗教的自由については不寛容であったからである<sup>26</sup>。また、彼は後述するニール (A. S. Neill, 1883-1973) やオニール (E. F. O'Neill, 1890-1975) のように、パブリックスクールの伝統的カリキュラムが有している学問的権威を排除したり、それを乗り越えようとすることもなかった。しかし、それにもかかわらず、彼の教育思想、すなわち「教師の専門性の具現化」への献身が公立学校に与えた影響は少なくない。それは公立学校の教師への影響や、教職アイデンティティの形成と強化に向けた動きを招来することになるからである。

### (3) 教育理想の折衷—公立学校の「時間割」—

では、フィンドレイの教育思想が公立学校に与えた影響はどのような点に現れているであろうか。ここで着目する第一次史料は、ロンドン・カウンティ議会の視学官、ブレイ<sup>27</sup>の著作『学校組織論 (School Organisation)』<sup>28</sup>である。これは今日的にいえば学校経営論の範疇に属するが、その叙述から窺い知ることができるのは、当時の新教育思想がどの程度の拡がりをもっていたかということである。また、ブレイの解説や「時間割」の事例からみえてくるのは、当時の教育思想の状況の複雑さとそれに付随して現れてくる「時間割の複雑化と厳密化」という、いわば新教育の理念に拮抗する動きである。

まず、彼は『学校組織論』の「カリキュラム」の項で次のような考え方を展開している。

「カリキュラム、シラバス、『時間割』—これらそれぞれの決定においては、次の諸点について当然の考慮がなされるべきである。(1) 価値ある指針を見いだせるであろう1910年教育法規<sup>29</sup>の精神。例外的な事例に応じるために、正当な自由が与えられているが、そこで取り上げられたある科目は、教育意図や教育目的すべてのために必修 (obligatory) である。諸教科の合一性というヘルバルト主義原理はかなり理解されている。実際の教育活動に関するフレーベルの主張と教育を周囲の環境に合わせる必要性も、幅広く好ましい承認を受けている。(2) 子どもたちの学年 (クラス)、

性別、年齢、素質。(3) 職員の質。(4) 建物と設備。(5) ミーティングの時間。(6) 地域環境一般。たとえば、農業地域では農業と園芸の基礎的原理が教えられることが望ましい。また、この例では、自然学習のための高大な原野が存在する。フランスやドイツの田園の学校では、これらの科目は概して著しく注目されている」<sup>30</sup>。

彼の解説は、一瞥するだけで広範な教育思想を踏まえたものであることがわかる。さらに、彼はヘルバルト主義原理について、「その教授科目というものは、子どもの考えが思考の輪の中で互いに結びつくように、できる限り互いにつながり、また関連づけられているべきである」<sup>31</sup>、と述べているのである。視学官であるブレイの解説から、ヘルバルトの教授原理としての画一性あるいは斉一性に加えて、知識の統合への重視が一般的に理解されていたということがわかる。と同時に、ここにはフレーベル主義の承認と欧米の新教育運動期の多様なカリキュラムに対する着目の姿勢も認められる。

つまり、イギリスのヘルバルト主義者もまた、フレーベル主義や欧米の新教育思想をうまく受容し採用していたのである。しかも、このようなカリキュラム及び教育方法への折衷の態度は、ブレイが興味深いとして紹介した「時間割」にも現れており、それは旧教育に新しい教育内容 (自然学習、ガーデニング) を加えた「時間割」に示されている (Table 3-A, 3-B)。

## 4. 「時間割」の複雑化・厳密化と再弾力化—多義化する新教育運動第Ⅲ期—

### (1) 「時間割」の複雑化と厳密化

では、第Ⅱ期の現象、つまり多様な教育思想が受容された時期は、「時間割」という点においてはどのような変化をもたらすことになるのであろうか。「時間割」に関するブレイの言説からこの点を考察してみよう。

「他の事情が同じならば、学校が円滑に機能するかどうかは、多くの『時間割』の適切さに依存しており、それは、常に地方教育当局と勅任視学官によって承認されなければならない。最小の摩擦でそれを機能させ、したがって時間と力を節約したいのであれば、それを計画するにはスキル、詳細な知識、慎重さが必要である。『時間割』は学校の第二の時計であり、その文字面にはとびとびに一日の時刻が示され、全クラスで進行している授業の種類や休み時間、朝礼、下校の時刻が示されている。それを動かす力 (motive power) は、建物のすみずみまで浸透し、静かに機能しており、学

校の日常生活に必要である学習の物質的変化 (materials changes) すべてを支配している編成者の精神である」<sup>32</sup>。

この叙述から見えてくるのは、「時間割」への法的承認、効率的な時間使用のための緻密な計画性、それを遂行する精神の必要性である。これらは視学官という彼の立場からすれば当然のことであろうが、「時間割」を動かす力を「編成者の精神」と彼が断定するところに着目すれば、新教育運動の掲げる個性化や個別化、「個人の自由」の理念がその後の教育界においてそう単純に浸透していかなかった、という状況が浮かび上がってくる。つまり、新教育思想を受容したかに見える局面から、「時間割」の複雑化と厳密化という新しい局面が現れているのである。それを裏付けるように、ブレイの叙述は以下のように続いていく。

「時間割を編成し計画する際に、カリキュラムに関して既に述べたことに加えて、次のような配慮が相応の重要性をもつはずである。

(1) カリキュラムの各教科にあった望ましい量の時間。(2) (a) 教科の相対的な重要性と難しさ。(b) 授業が理論的か実践的か。(c) 生徒の年齢と能力にかかわる各授業の望ましい長さ。(3) (a) 午前中か午後か、すなわち一日の授業の早い部門か遅い部門か<sup>33</sup>。(b) 教科の性格—それらが必要とするものが、主として知的なものか、機械的なものか。(c) 教職員は、口述の授業が2つないし3つ連続するとその負担が大きい。(d) 建物の内部構造にかかわる授業の適切な配分—2人以上の教師が同じ部屋で独立して働いている場合にこの点は強調される」<sup>34</sup>。

ここでは、教科への適切性、教科の重要性と難易度、授業の特徴、学年と生徒の能力、授業の時間帯、教科の性格、授業スタイル、授業数、授業の時間帯、教師数、授業の場所などへの配慮の重要性が強調されている。つまり、「時間割」編成のファクターはかなり多くなり、同様に「時間割」編成も複雑になっていったことがわかる。ここで看過しがたいのは、そのことによって、「時間割」は厳密にならざるをえない、というパラドックスである。なぜなら、複雑な「時間割」を確実に実行するためには、その「時間割」を厳密化することによって保障の方が容易だからである。

したがって、この事象から19世紀末以降の新教育運動の思想がおよそ15年間を経て揺り戻し現象を招来した、と解釈することができよう。もちろん、この解釈を裏付けている基礎データは同一地域でも同一校でもないた

め、その実証性への確からしさあるいは明証性に対して疑念が生じないわけではない。しかし、ブレイの同名の著作の度重なる刊行を考慮に入れるならば、この解釈はかなりの普遍性を有しているといえよう。

さて、歴史的に辿るならば、その後、第一次世界大戦の集結という史実が出てくる。この大戦でのイギリスの被害は甚大であり、この時期、パブリックスクールなどでのエリート教育に対しても不信感が生まれた。これは教育関係者にとって無視することができず、それゆえ戦争によって失墜してしまった人間性を回復するために教育が重視され、新教育運動が公立学校においても生起してきたのであった。その運動には、教師だけでなく、知識人、教育学者、勅任視学官など、多様な層の人々が関与していた。それゆえ、新しい教育法規の制定に意欲を燃やす者から国家権力への強力な批判を有した者まで、多様な考えの者が参画してきたため、新教育運動は、幅広く多義的な教育思想を包含することになるのである。

では、その後の新教育運動において、「時間割」はどのように変遷していったのであろうか。

## (2) 「時間割」弾力化への再挑戦

イギリスでは、その後、「時間割」を編成しないオニール<sup>35</sup>の実践 (Table 4-A, 4-B) や<sup>36</sup>、授業への出欠席すら子どもの自由に任じたニールのサマーヒル校の実践などが出現し、時間割の弾力化に再度挑戦していく動きが出現する。前者のオニールは、「時間割」を編成することなく子どもの自由な学習活動を保障し、またその学習内容がどのように進んでいるかを教師が把握するための「学習記録」<sup>37</sup>を編み出した。彼の革新的な取組みである、「創造的教育—なすことによって学ぶ—」<sup>38</sup>の特徴は、抑圧感をあまり子どもに感じさせない点にあり、それは学習活動の時間を細かく区切らず、教師の側が学習状況を記録する方法であった。彼の説明によれば、学んだり活動したりする喜びを子どもが享受している様子や積極的に快活な子どもの学習活動が描出されている。それは、いわば「実存的な時間」に子どもをおくという試みであった、ということができる。なぜなら、そこに紹介された子どもたちの声には、生き生きとした躍動感溢れる情緒的感覚の表出とともに、時間感覚が無化された様子とが窺われるからである。

さらに、私立の新学校のキングアルフレッド校 (Table 5) やビデールズ校 (Bedales School, 1893-) などでは、アメリカのドルトン州でパーカーが実験したドルトン・プランを採用し、「時間割」を個別学習に対応させようとする動きが出てくる。その契機が「教育の新理想」年次研究大会<sup>39</sup>でパーカーが述べた「効用性」「効率性」「容易さ」の特徴である。彼女は次のように述べている。

「ドルトン実験プランは、単純で経済的な学校の再組織化である。その学校で生徒と教師がより有利に作用し、生徒と教師の非効率を最小限の状態になるよう作用する。それは、カリキュラムを加えたり、またカリキュラムを変えたりするものではない。また、費用のかかる学校装置でも、手の込んだ機器でもない。それは、教科教授について何か唯一の方法があるという考えを排除するものであり、子どもの観点から物事にアプローチするものである。それは、教授を完全にすることに対して何の犠牲もなく、生徒を生き生きとするように、そして、ゆるやかに向上するように平等の機会を提供している」<sup>40</sup>。

パーカーのこの見解を了承したイギリスの新教育運動家は、ドルトン・プランをモンテッソーリの教育思想の延長線上において理解したこともあり、彼女の教育方法論は急速に受容される。だが、彼女の重視した「共働の原理」はここでは軽視され、伝統的教科の維持のために変容していった。また、パーカーも変更の可能性を認めていたこともあって、ドルトン・プランの真髄は理解されず、やがてドルトン・プランは衰退していくことになる。つまり、ドルトン・プランは伝統的教科の教授手段として採用されたのであり、ドルトン・プランを研究した宮本によれば、これはイギリスの新教育の一つの側面と解することができる<sup>41</sup>。この史的解釈は、ビデールズ校におけるドルトン・プランの導入にも明証されている。実は、ジョアン・キング (Joan King (née Burnham)) は、ビデールズ校で生じた葛藤について以下のように吐露しているからである。

「それぞれの教科の学習活動の月間アサイメント (a monthly assignment of work) が、目標達成のためのテストとともに設定される。そして、生徒は自分がテストに合格した時に次の段階 (grade) へと進んでいくためのこれらのアサイメントを経て活動した。それぞれの教科には、いくつかの義務的な授業時間 (a few compulsory class periods) があつたが、時間のほとんどは段階別学習活動にあてられた個人の時間枠 (individual periods) に取られてしまった。これらの時間枠は、図書館や教科教室で費やされ、教師はそこで手助けしたり学習活動を記録したりし、全ての段階のテストをすることを好んだ。それぞれの週の正規の〔クラス〕の教師たちは、進捗状況について話し合い、それぞれの教科に費やされている授業時間数が記録されている個人の学習時間シート (individual time-sheets) を

点検するために、彼らの生徒を理解した。・・・これは人間の本性を刺激しすぎてしまったようだ」<sup>42</sup>  
(〔 〕内は筆者)。

この叙述から、オニールとは異なった学習記録の方法が出現してきたということがわかる。新教育の理念に従うならば、多様な学習内容を個人に焦点化するわけであるから、子どもは時間枠にしばられることなく活動することができるというメリットがみえてくる。だが、その場合の教師の役割は、生徒の本性・自然性を解放し自由な主体的活動を保障することと平等な学習活動を保証することであり、そのために詳細に記録すること、つまりデータに基づいた学習進捗の記録が不可欠となったのである。

また、イギリスでのドルトン・プランの取組みは、イギリスへの紹介者リンチ (A. J. Lynch) が、1923年の「教育の新理想」研究大会において、自らの教育実験 (The Dalton Plan in a Boys' Elementary School) について語った文言に認められる。彼は、ドルトン・プランを採用したことによって「我々の学習活動の教育課程 (コース) の中で、我々が見いだした有利な点は何か？」と問い、有利な点を12まで列挙し、その内の12番目を「協同、自己犠牲、社会的奉仕といった諸価値を実際に実現し得る社会化のための広い学習領域 (scope) が提供される」<sup>43</sup>と結んでいる。さらに彼は、新教育連盟の南アフリカでの教育会議において<sup>44</sup>、ドルトン・プランは、次の三つの方法のいずれかで実施されたと解説している。それは、(a) 教科教室と教科専門の教師を有す (with subject-rooms and with specialist teachers), (b) 教科教室も教科専門の教師もない (without subject-rooms and without specialist), (c) 特別教科のみで (with particular subjects only) の三つの方法である。この学級経営の観点を無視しない受容の仕方については、試験制度とドルトン・プランを調停させようとしたことに由来し、その結果、ドルトン・プランの受容と展開の過程で「学習進捗記録」表の開発が不可避となった、とみることができる (Table 6, 7, 8, 9, 10, 11)。

このことはドルトン・プランのイギリスでの受容が、子どものニーズの単純な重視ではなかった、ということを示している。観点を換えれば、新教育運動第三期は、学習の自由の追究とその困難性へのジレンマがさらに複合的・複雑に進行し、このことが「時間割」改革のひとつの特徴を基礎づけた時期である、と解することができる。換言すれば、この時期に格子状の「時間割」を撤廃させる方向へと進んでいった新学校もまた、伝統的な学問やそれを肯定する試験制度の前に、自由の停滞を余儀なくされたという特徴が現れたのである。

しかし、ニールのサマーヒル校のように徹頭徹尾、教

師と子どもの自律性を信頼し、時間割自体を編成しなかった学校もある。ちなみにサマーヒル校のユニークさが顕在化するのには、1920年代末のころであり、その姿勢が、1960年代の英米の反カルチャー運動などに影響を与えたことは、よく知られているとおりである<sup>45</sup>。

##### 5. 小括—1930年代のハドー報告書への反映—

以上みてきたように、イギリス新教育運動期の「時間割」改革は、一義的でも一枚岩的なものでもなく、「自由な時間割の要求」、「多様な時間割の創出」、「時間割の採用可能性の両義的拡大」という3つの変革諸相と厳密化、多様化、弾力化、自律化という4つの拮抗する特徴を有していた、と解することができる。もちろん、その変革を支えていたのは、教師自身が自らの信念に基づいて獲得していた教育哲学である。なぜなら、新教育運動期の「時間割」改革は、次の2つの動きを学校の教育活動にもたらしたからである。

第一に、「時間割」編成上の諸要素に教師と子どもの側のニーズが付与されたことである。これがもたらされた背景には、a. 多様な教育内容の必要性和その対応が求められたこと (J. J. Findlay), b. アカデミックな試験制度に拘束されない教師の信念が根底にあったこと (O'Neill), c. 生活リズムへの配慮の結果として、身体と精神の集中を促進するレクリエーションが導入されたこと<sup>46</sup>, d. 教師に子ども理解の能力や学習活動を記録する能力が要請されたこと (O'Neill) といった教育革新の試みがあった。第二に、柔軟な「時間割」編成原理をもたらしたことである。その背景には、a. アカデミックな教育内容を細分化された学科 (school subjects) で捉えるのではなく、学習領域として捉える教師の能力を要請したこと (J. J. Findlay), b. 個人の興味・関心に方向づけられた学習を進めるための個別学習計画と学習活動記録の必要性和その効果が着目されたこと (A. J. Lynch, O'Neill), c. 学習集団の組織化と時間配分が強調されたこと (S. E. Bray), といった「時間割」に関わるさまざまな考えが展開されたことがある。

この解釈は、ハドー報告書に記された「子どもは、可能な限り彼ら自身のペースで進むことが認められるべき、ということが広く受け入れられている」というテーゼ、すなわち「個人の学習ペース」を重視する教育思想の唱導に明証されている<sup>47</sup>。それは近代的な時間規律を子どもに教え込む方向とは異なっており、定刻 (punctuality) の態度様式を要求するイギリス帝国主義の価値規範へのアンチテーゼである。それゆえ、新教育運動期の教師の専門性と自律性が自由な行為の余地を作り出したわけである。

ところが、よく知られているように、この進歩的な教育思想は、その後プラウデン旋風を経てイギリスの教育

界を席卷した。しかし、同様に、個人の学習ペースや学習スタイルの追究は、つまり新教育運動が生み出した進歩主義教育の理念は、ラスキン・カレッジでのキャラハン演説によって撤退を余儀なくされたのであった。ただ、ナショナル・カリキュラム制定 (1988年)以降も、「時間割」は、専門性を有した教師の葛藤とジレンマを内包しつつ、依然として、教師と子どもを方向づける規範や教材として存在し続けている。イギリスでは、「時間割については、今日、生徒のグルーピングのタイプとカリキュラム思想 (Curriculum philosophy) を考慮に入れるように、と主張されている」<sup>48</sup>とのことである。それゆえ、時間割編成においては、多様なファクターへの考慮が求められており、時間割は複雑化の様相を強めている。

総じて国民のための学校教育制度の成立以降、近代の初等学校や中等学校は、近代化された労働者を育成するために工場労働における時間分割よりもさらに細密かつ厳密に時間を区切るという仕方でも基礎知識の伝達と時間秩序とを同一次元で捉えたわけであるが、この捉え方は、つまり教育内容と時間とを同一次元で捉える思考法は、21世紀になった今も変わりはない。しかも、教師の専門性は、近年のイギリスでは、いかに効率よく教授するか、いかに知識を記憶させるかということに偏り、そこに教師の専門性を介在させる余地は希薄になってきている<sup>49</sup>。しかし、イギリス新教育運動期に、教育行為への自律性を保障する方法の一つとして「時間割」編成が加えられるようになり、教師の教職アイデンティティ獲得に歩を進めたという解釈は疑い得ない。ここに、「均等な時間の流れ」あるいは「抽象的時間の長さ」というクロノロジカルな時間意識に、体験や活動を取り入れることによる「実存的な時間意識」が加わり、学校ではそれらをバランスよく取り入れることに腐心せざるをえなくなったのではないか、という次なる仮説がでてくる。この点への考察については、本論では立ち入ることができなかった。カリキュラム思想の意味内容の分析及び考察によって、この点への解明も可能になるように思われる。加えて、自発性や個性への着目と時間意識にはどのような相関性があるのかなど、本論をめぐる問いは多々ある。これらについては今後の課題としたい。

付記：

本論は、平成17年度～平成19年度科学研究費基盤研究C「新教育運動期における授業時間割の改革と編成原理に関する比較的研究」(課題番号：17530570, 研究代表者：宮本健市郎、研究分担者：山崎洋子、山名淳、渡邊隆信)の『研究成果報告書』(平成20年3月)に収録した山崎洋子「イギリス新教育運動における「時間割」改革の諸相と特徴—「教師の自律性」形成に向けて—」(pp. 63-84)を加筆修正したものである。

(Table 1-A) 学校 A (4 歳児—7 歳児対象) セッティング A, B, C

SCHOOL A (KINDERGARTEN).—Four to Seven Years (Boys and Girls), 12 hrs. 30 mins. per week.

	Monday.	Tuesday.	Wednesday.	Thursday.	Friday.
9.30	Hymn and Prayer	Hymn and Prayer	Hymn and Prayer	Hymn and Prayer	Hymn and Prayer.
9.40	Scripture Stories	Scripture Stories	Scripture Stories	Scripture Stories	Scripture Stories.
9.55	{Set A, Reading Sets B & C, Building}	Drill	Drill	{Set A, Sewing Sets B & C, Reading}	K.G. Games.
10.15	{Set A & B, Writing Set C, Drawing}	Set A, Drawing Sets B & C, Reading	Sets A & B, Arithmetic Set C, Bricks	Set A, Reading Sets B & C, Sewing	Set A, Arithmetic. Sets B & C, Writing.
10.45	Recreation in Garden.	Recreation in Garden	Recreation in Garden	Recreation in Garden	Recreation in Garden.
11.15	{Set A, Sewing Sets B & C, Reading}	Writing	Writing	{Set A, Dictation Sets B & C, Writing}	Set A, Reading. Sets B & C, Bricks.
11.30	K.G. Games and Songs	{Set A, Reading Sets B & C, Bricks}	Sand (for Geography)	K.G. Games	Plaiting.
11.45	Tables	Arithmetic	K.G. Games	Object Lesson	{Set A, Writing. Sets B & C, Reading.
12.	Fairy Tales for vv. reproduction	Paper Folding, Cutting and Pasting	History	Drawing, Object or Modelling	Balls.
12.15	Class Singing	"	Reading	Class Singing	Sticklaying.
ANALYSIS.—					
	Mental Work	Set A. 7 h. 40 m.	Set B. 7 h. 25 m.	Set C. 6 h. 25 m.	
	Manual and Physical	4 " 50 "	5 " 5 "	6 " 5 "	
	Total	12 " 30 "	12 " 30 "	12 " 30 "	

Preparatory for the Preparatory School.  
423

(Source: Board of Education, *Special Reports of Educational Subjects*, Vol. 6, Preparatory Schools for Boys: Their Place in English Secondary Education, 1900, p. 423.)

なお、以下の Table 1-B, 1-C は、Table 1-A をセッティング別に訳出したものであり、表の右端の「旧教育、新教育」の欄は、筆者が考察のために書き足したものである。

(Table 1-B) 学校 A の時間割 (4 歳児—7 歳男女混合, セッティング A)

School A (Kindergarten)—Four to Seven Years (Boys and Girls), 12 hrs. 30 mins. per week, Setting A

授業内容	月	火	水	木	金	計	△ : 旧教育 ※ : 新教育
Hymn and Prayer 賛美歌、お祈り	10	10	10	10	10	50	△
Scriptures Stories 聖書のお話	15	15	15	15	15	75	△
Reading 読み方	20		15	30	15	80	△
Drill 体練		20	20			40	△
Writing 書き方	30	15	15		15	75	△
Sewing 編み物	15	15		20		50	△※
Arithmetic 算数		15	30		30	75	△
Tables かけ算	15					15	△
K. G. Games and Songs 幼児ゲームと歌	15					15	※
Fairy Tales for vv. Reproduction 幼児用おとぎ話	15					15	※
Class Singing 歌	15			15		30	※
Paper Folding, Cutting and Pasting 紙細工、切り絵、粘土		30				30	※
Sand (for Geography) 砂あそび (地理導入)			15			15	※
K. G. Games 幼児ゲーム			15	15	20	50	※
History 歴史			15			15	△
Dictation 聞き取り				15		15	△
Object Lesson 実物教授				15		15	※
Drawing, Object or Modeling 絵画、実物、モデリング		30		15		45	※
Balls ボール遊び					15	15	※
Plaiting ブレイティング					15	15	※
Sticklaying スティックレイニング					15	15	※
授業時間 総計	150	150	150	150	150	750	12hrs. 30mins.
Recreation in Garden 庭でのレクリエーション 10.45-11.15	30	30	30	30	30	150	※

(Table 1-C) 学校 A の時間割(4 歳-7 歳男女混合, セッティング B)

School A (Kindergarten)-Four to Seven Years (Boys and Girls), 12 hrs. 30 mins. per week, Setting B							
授業内容	月	火	水	木	金	計	△:旧教育 ※:新教育
Hymn and Prayer 賛美歌、お祈り	10	10	10	10	10	50	△
Scriptures Stories 聖書のお話	15	15	15	15	15	75	△
Building 文章構成	20					20	△
Writing 書き方	30	15	15	15	30	105	△
Reading 読み方	15	30	15	20	15	80	△
Arithmetic 算数		15	30			45	△
Tables かけ算	15					15	△
Drill 体練		20	20			40	△
Bricks 積み木		15			15	30	※
Sewing 編み物				30		60	△※
K. G. Games and Songs 幼児ゲームと歌	15					15	※
Fairy Tales for vv. Reproduction 幼児用おとぎ話	15					15	※
Class Singing みんなの歌	15			15		30	※
Paper Folding, Cutting and Pasting 紙細工、切り絵、粘土		30				30	※
Sand (for Geography) 砂あそび(地理導入)			15			15	※
K. G. Games 幼児ゲーム			15	15	20	50	※
History 歴史			15			15	△
Dictation 聞き取り						15	△
Object Lesson オブジェクト・レッスン				15		15	※
Drawing, Object or Modeling 絵画、オブジェクト・レッスン あるいはモデリング				15		45	※
Balls ボール遊び					15	15	※
Plaiting プレイティング					15	15	※
Sticklaying スティックレイング					15	15	※
授業時間 総計	150	150	150	150	150	750	12hrs. 30mins.
Recreation in Garden 庭でのレクリエーション (10.45-11.15)	30	30	30	30	30	150	※

(Table 1-D) 学習時間配分の分析(セッティング別)

授業内容の質	セッティング A		セッティング B		セッティング C	
	実時間	割合	実時間	割合	実時間	割合
Mental Work (知的な 学習活動)	7時間40分	約61%	7時間25分	約59%	6時間25分	約51%
Manual and Physical (手作業と身体活動)	4時間50分	約39%	5時間5分	約41%	6時間5分	約49%
授業時間 総計	12時間30分	100%	12時間30分	100%	12時間30分	100%

(Table 2-Aa) 学校 B(上級学年, 6 歳児—9 歳児男女混合)

SCHOOL B (UPPER DIVISION).—Six to Nine Years (Boys and Girls), 17 hrs. 45 min. per week.

—	Monday.	Tuesday.	Wednesday.	Thursday.	Friday.	Saturday.
9.30	Scripture . . .	Prepare { Spelling - French	Coins . . .	History . . .	Description of Brush Pictures	Painting.
10	Geography . . .	Story . . .	Writing . . .	Brush Pictures	Criticise Brush Pictures	Painting.
10.20	Drill . . .	Drill . . .	10.15 Mental Arithmetic	Drill . . .	Drill . . .	10.30. Drill.
10.35	French . . .	Number . . .	Memory Drawing	French . . .	Poetry . . .	10.45. Geography.
10.50	Recreation . . .	Recreation . . .	Recreation . . .	Recreation . . .	Recreation . . .	11.20. Recreation.
11	Composition . . .	Nature Lesson	Gymnastics . . .	Tonic Sol-fa . . .	French . . .	11.30. Games.
11.40	Correct Composition	Games . . .	„ . . .	Arithmetic . . .	Reading & Dictation	12. Reading & Dictation
12.5-12.30	Number . . .	Modelling . . .	„ . . .	Brush Pictures	Gardening . . .	—

Gardening on Thursday afternoon; 2.45-3.30.

ANALYSIS.—Mental Work . . . . . 8 hrs. 45 min.  
 Manual and Physical . . . . . 9 „ 0 „  
 Total . . . . . 17 „ 45 „

N.B.—Some subjects are not easily classified. Vocal Music and Memory Drawing are here reckoned as Physical and Manual Exercises.

(Source: Board of Education, *Special Reports of Educational Subjects*, Vol. 6, Preparatory Schools for Boys: Their Place in English Secondary Education, 1900, p. 424.)

(Table 2-Ab) 学校 B(低学年, 5 歳児男女混合)

SCHOOL B (LOWER DIVISION).—Five Years (Boys and Girls), 9 hrs. 10 min. per week.

—	Monday.	Tuesday.	Wednesday.	Thursday.	Friday.	Saturday.
9.30	Scripture . . .	Number . . .	Reading . . .	{ Number, and Mat- plaiting	Measuring.	No work.
10	Number . . .	Story . . .	Paper Cutting . . .	Geography . . .	Reading.	
10.20	Drill . . .	Drill . . .	10.15 Brush Pictures . . .	Drill . . .	Drill.	
10.35	Drawing . . .	French . . .	10.30 French . . .	Correct Brush Pictures	Drawing.	
12.50	Recreation . . .	Recreation . . .	Recreation . . .	Recreation . . .	Recreation.	
11-11.30	Modelling . . .	Natural History	Flower Painting	Writing and Drawing	French.	

ANALYSIS.—Mental Work . . . . . 4 hrs. 40 min.  
 Manual and Physical . . . . . 4 „ 30 „  
 Total . . . . . 9 „ 10 „

(Source: Board of Education, *Special Reports of Educational Subjects*, Vol. 6, Preparatory Schools for Boys: Their Place in English Secondary Education, 1900, p. 425.)

(Table 2-B) 学校 B の時間割(上級学年, 6 歳-9 歳男女混合)

School B (Upper Division)-Six to Nine Years (Boys and Girls), 17 hrs. 45mins, per week								
	月	火	水	木	金	土	計	△:旧教育 ※:新教育
Scripture 聖書	30						30	△
Geography 地理	20					35	55	△
Drill 体練	15	15		15	15	15	75	△
French フランス語	15			15	40		70	△
Recreation レクリエーション	10	10	10	10	10	10	60	※
Composition 作文	40						40	△
Correct Composition 作文清書	25						25	△
Number かず	25	15					40	△
Prepare Spelling French 綴り字導入、フランス語導入		30					30	△
Story お話		20					20	※
Nature Lesson 自然学習		40					40	※
Games ゲーム		25				30	55	※
Modeling モデリング		25					25	※
Coins お金			30				30	※
Writing 書き方			15				15	
Mental Arithmetic 暗算			20				20	△
Arithmetic 算数				25			25	△
Memory Drawing 線画(想起)			15				15	※
Gymnastic 体育			90				90	△
History 歴史				30			30	△
Brush Pictures (午前) 筆画				20			20	※
Brush Pictures (午後) 筆画				25			25	※
Description of Brush Pictures 筆画解説					30		30	※
Criticize Brush Pictures 筆画批評					20		20	※
Tonic Sol-fa ドレミファ音階				40			40	※
Poetry 詩					15		15	※
Reading & Dictations 読み方、聞き取り					25	15	40	△
Gardening ガーデニング					25		25	※
Painting 絵画						60	60	※
	180	180	180	180	180	165	1065	
Gardening ガーデニング 木曜日のみ (2.45-3.30)				45				※

上記は、Table 2-A を訳出したものである。なお、表の右端の「旧教育、新教育」の欄は、筆者が考察のために書き足したものである。

(Table 2-C) 学習時間配分の分析

授業内容の質	時間配分	
	実時間	割合%
Mental Work (知的な学習活動)	8時間45分	約49%
Manual and Physical (手作業と身体活動)	9時間	約51%
授業時間 総計	17時間45分	100%

注：いくつかの教科は容易に分類できない。

歌などの音楽と線画（想起）は、ここでは身体訓練と手作業に計算されている。

(Table 3-A) 極めて貧困な地域の最も興味深い「時間割」(二部制)

TIME-TABLE OF A MOST INTERESTING BOYS' SCHOOL IN AN EXTREMELY POOR DISTRICT.

	Sta.	9.0-9.40	9.40-10.15	10.15-10.50	10.50-11.5	11.5-11.25	11.25-12.0	1.50-2.0	2.0-2.40	2.40-3.20	3.20-3.30	3.30-3.55	3.55-4.25
M	6 & 7 V. IV. III. II. I.a I.b	New Test.	Practical Arith.	Read.	Play	Dictation	Drawing Literature Geog. (L) N. Study Geography Drawing	Mental Arith.	Singing Drawing W. Bldg., Ph. Ex. English, W. Bldg. Drawing Recitation English, Ph. Ex.	Literature Nature Study (L) Drawing Singing Drawing Nature Study	Play	Ph. Ex. Recita. Geog. (L) Ph. Ex. Litera.	Geog. Compn. Hist. (L) Litera. W. Bldg.
T	6 & 7 V. IV. III. II. I.a I.b	Old Test.	Theoret. Arith.	Dictn.		Reading	History Geog. (L) N. Study Word Bldg. Geography Drawing Geography	Mental Arith.	Drawing Composition English Gardening Drawing Nature Study (L) W. Bldg., Ph. Ex.	Nature Study (L) Recitation Optional Drawing History Singing "		Litera. Hist. (L) W. Bldg. Compn. Ph. Ex. "	Compn. W. Bldg. Compn. Drawing W. Bldg. History "
W	6 & 7 V. IV. III. II. I.a I.b	New Test.	Practical Arith.	Recit. Read. " " " "		Ph. Ex. Dictation " " " "	History (L) Recitation Geography " Literature " Composit'n	Mental Arith.	Singing Geography Literature Drawing History (L) Nature Study Drawing	English Singing History (L) Compn., Recita. Recitation Recit., Ph. Ex.		Dictation Ph. Ex. " Litera. Geog. Hist. (L) "	Nat. St. Drawing History Recita. W. Bldg. Singing "
T	6 & 7 V. IV. III. II. I.a I.b	Old Test.	Theoret. Arith.	Read. Recit. Read. " " "		C. Books Compn. " " Dictation Literature Dictation	Drawing Maps Literature N. Study Gardening Word Bldg. N. Study	Mental Arith.	Composition Drawing Nature Study (L) English, Litera. Comp., W. Bldg. English, Singing Recitation, Sing.	Maps Nature Study Reading Ph. Ex., Singing Comp., Ph. Ex. Drawing		Organised Games or Swimming Compn., Recitation Drawing W. Bldg. Geog. (L) Recitation, "	
F	6 & 7 V. IV. III. II. I.a I.b	Memory Work or Hymns	Pract. or Theoret. Arith.	Read.		Compn.	Geog. (L) En. & W. Bg. Drawing Literature Recitation Drawing Literature	Mental Arith.	C. Bks., W. Bldg. Health W. Bldg. Health W. Bldg. Health	W. Bldg., Health History Health, Recita. Ph. Ex. English, Dictation, Health W. Bldg., English		Compn. Singing Geog. (L) W. Bldg. Recita. Compn.	Optional Litera. Compn. Dictation Nat. St. Drawing Litera.

NOTES.—L=Lantern in use. The subjects specialised are: Drawing (2 teachers), Recitation (2 teachers), Singing (1 teacher), Geography (3 teachers), Nature Study (2 teachers), History (V., VI., VII.) (1 teacher).  
Geography so arranged that observational work can be taken at 12 noon if required.  
Next Year Geography will be in the hands of 1 teacher only. Practically all Drawing will be taken by 1 teacher. All Nature Study will be under 1 teacher. So that specialisation will be carried to the utmost limits in respect of Drawing, Recitation, Geography, Nature Study, and Singing. As a rule, Physical Exercises do not extend beyond 20 minutes.

(Source: S. E. Bray, *School Organisation*, University Tutorial, 1911. p. 246.)

(Table 3-A を訳出したものが, Table 3-B である)

(Table 3-B) 極めて貧困な地域の最も興味深い時間割 (二部制)

学年	9.00-9.40	9.40-10.15	10.15-10.50	10.50-11.05	11.05-11.25	11.25-12.00	1.50-2.00	2.00-2.40	2.40-3.20	3.20-3.30	3.30-3.55	3.55-4.25		
月 6&7														
V	新約聖書	算数演習	読み方		聞き取り	図画	暗算	歌	文学	遊び	体育	地理		
IV						文学		自然学習	図画		図画	自然学習	作文	
III						地理		言葉構成、体育	図画		図画	図画	歴史	
II						自然学習		英語、言葉構成	図画		図画	図画	歴史	
Ia														
Ia	旧約聖書	算数理論	聞き取り		読み方	図画	暗算	英語、体育	自然学習	遊び	文学	言葉構成		
Ib						歴史		自然学習	図画		図画	図画	図画	
火 6&7						図画		図画	図画		図画	図画	図画	図画
V						地理		自然学習	図画		図画	図画	図画	図画
IV														
III	新約聖書	算数演習	読み方		聞き取り	図画	暗算	英語、体育	自然学習	遊び	体育	地理		
II						文学		自然学習	図画		図画	図画	図画	
Ia						地理		自然学習	図画		図画	図画	図画	図画
Ia						図画		自然学習	図画		図画	図画	図画	図画
Ib														
水 6&7														
V	旧約聖書	算数理論	読み方		聞き取り	図画	暗算	英語、体育	自然学習	遊び	体育	地理		
IV						文学		自然学習	図画		図画	図画	図画	
III						地理		自然学習	図画		図画	図画	図画	図画
II						図画		自然学習	図画		図画	図画	図画	図画
Ia														
Ia	新約聖書	算数演習	読み方		聞き取り	図画	暗算	英語、体育	自然学習	遊び	体育	地理		
Ib						文学		自然学習	図画		図画	図画	図画	
木 6&7						地理		自然学習	図画		図画	図画	図画	図画
V						図画		自然学習	図画		図画	図画	図画	図画
IV														
III	旧約聖書	算数理論	読み方		聞き取り	図画	暗算	英語、体育	自然学習	遊び	体育	地理		
II						文学		自然学習	図画		図画	図画	図画	
Ia						地理		自然学習	図画		図画	図画	図画	図画
Ia						図画		自然学習	図画		図画	図画	図画	図画
Ib														
金 6&7														
V	新約聖書	算数演習・理論	読み方		聞き取り	図画	暗算	英語、体育	自然学習	遊び	体育	地理		
IV						文学		自然学習	図画		図画	図画	図画	
III						地理		自然学習	図画		図画	図画	図画	図画
II						図画		自然学習	図画		図画	図画	図画	図画
Ia														
Ia	旧約聖書	算数理論	読み方		聞き取り	図画	暗算	英語、体育	自然学習	遊び	体育	地理		
Ib						文学		自然学習	図画		図画	図画	図画	
金 6&7						地理		自然学習	図画		図画	図画	図画	図画
V						図画		自然学習	図画		図画	図画	図画	図画

(Table 4-A) オニールの学校のカリキュラム内容

	Subjects	Contents
1	Arithmetic	(Give number of sums done in the week)
2	English-written	(Stories, letters, plays, original poems, written history, written geography, written science)
3	Making and publishing of original books	note: These books include collections of poetry, corrected history, geography, or story work.
4	Reading a good book	note: A list of good books is given but is not exclusive.
5	Poetry	-written, read, listened to, or read aloud
6	Music	-sung, listened to, or studied
7	History	-read, written or acted preferably from the course you have decided on
8	Geography	-read, written, or practical, from course
9	Art-work	-pastel or painting
10	Needlework	
11	Making things	-in wood, paper ,cardboard, glass, etc
12	Repairs and tidying	note: Very necessary in a self-active school
13	Out-door work	
14	Book-club money paid	
15	Read magazines and newspapers	
16	Science	
17	Dancing	-expression of music or of poetry

Source : *Report of the Conference on New Ideals in Education held at Cambridge, from July 25 to August 1, 1919.*New Ideals in Education, 1919, pp. 95-6.

(Table 4-B) オニールの開発した学習記録

RECORD OF WORK.																	
" I desire so to live, that after my death, I may leave to others, a record of work well-done."																	
Name	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17
Albert Beckett	33	4	5	4	1	4	1	1	3	1	2	5	4	5	4	3	4
Ned Ingham	29	3	5	4	1	4	3	2	4	5	1	3	4	5	2	3	4
Norman Ingham	28	3	4	5	1	4	2	4	3	4	2	1	5	1	5	5	4
<p>Key. Work under col. 7, 8, etc. refers to 7, 8, etc. of the "Work to be done" list. Work is signed by 1 if done on Monday, 2 if done Tuesday, 3 Wednesday, 4 Thursday, and 5 if done on Friday. Teacher thus sees not only what is done but when it is done, e.g., it is bad to see that by Thursday a boy read papers on 1,—Monday, and had done no English.</p>																	

(左記の下段に記された学習記録についての注意事項)

Key. 7や8などは、「課題学習」リストの7、8などを指している。月曜日になされたら1、火曜日になされたら2、水曜日では3、木曜日では4、金曜日では5のように学習は記録されている。それゆえ、教師には何がなされているかだけでなく、いつそれがなされているかもわかる。たとえば、ある子が1、すなわち月曜日に課題のプリントを読み木曜日までには英語を学習しなかったと、理解するのは誤りである。

(Source, Ibid.)

(Table 5) キングアルフレッド校のドルトン・プラン/Wickstreed, J. H. 体制(1920-32)下の「時間割」<sup>50</sup>

時間帯	活動内容
9.30-11.05	個別の学習活動 (individual work) をするため、生徒の希望する何らかの教科の部屋 subject room (パーカーストのいう実験室 laboratories) で実施。
11.30-12.40	グループごとの学習活動のため、二つの授業時間枠になっている。英語教科を1週間1レッスンと数学と理科を各2週間に3回受けるグループに分けられた。 (競争の排除。学習は、評点や罰のストレス、恐怖、不安から解放された雰囲気におかれた。)

午後 2.00-4.00	ダルトン路線で運営。個人の勉強や各生徒が参加選択できるクラブに参加。ダンス、リトミック、工場見学、ゲーム、写真、工芸のクラブが準備された。生徒は、パーカーストがダルトンやニューヨークで導入していたゲーム、教育的な旅行、社会的集会、討論を希望した。
金曜日	午前中は、来訪訪問者によって書取りテストがあり、午後にはラテン語か地理の授業があった。

(Ron Brooks, *King Alfred School and Progressive Movement, 1898-1998*, University of Wales Press, *ibid.*, pp. 94-5 に書かれた内容より山崎作成。)

(Table 6) ドルトン・プラン採用校の「学習記録」の例<sup>51</sup>

No.	Assignment. Name.	I.	II.	III.	IV.	V.	VI.	VII.	VIII.	IX.	X.
		Started.									
34	Ridley, L.	10.4.23	4.6.23	31.8.23	13.12.23	14.2.24	8.5.24	28.5.24	15.7.24	21.11.24	9.1.25
35	Sargons, A.	10.4.23	19.5.23	25.6.23	25.7.23	8.10.23	28.11.23	18.1.24	18.2.24	19.3.24	1.5.24
36	Skelton, J.	10.4.23	22.6.23	7.9.23	16.1.24	6.10.24	7.11.24	28.11.24	31.1.25	3.3.25	
37	Spring, C.	10.4.23	16.7.23	16.11.23	20.12.23	25.1.24	4.3.24	15.4.24	11.9.24	31.10.24	8.1.25
38	Squires, G.	10.4.23	18.6.23	30.10.23	9.1.24	22.2.24	14.4.24	26.6.24	19.9.24	7.11.24	12.12.24
39	Stiff, J.	10.4.23	2.5.23	19.5.23	18.6.23	19.7.23	29.8.23	24.9.23	12.10.23	7.11.23	3.12.23
40	Swallow, E.	10.4.23	10.10.23	23.11.23	11.2.24	6.3.24	10.9.24	7.1.25			
41	Squate, B.	10.4.23	8.6.23	17.7.23	19.10.23	7.12.23	13.2.24	24.3.24	27.5.24	28.8.24	15.10.24
42	Taylor, R.	10.4.23	4.5.23	30.5.23	25.6.23	6.9.23	8.10.23	9.11.23	15.12.23	25.1.24	28.2.24

The records of these boys are shown below continued under the name of Form 2, which the age-group had reached at the end of one year.

No.	Assignment. Name.	I.	II.	III.	IV.	V.	VI.	VII.	VIII.	IX.	X.
		Started.	Started.	Started.	Started.						
34	Ridley, L.	25.3.25									
35	Sargons, A.	23.6.24	2.9.24	11.10.24	28.11.24	23.1.25	16.3.25				
36	Skelton, J.										
37	Spring, C.	27.3.25									
38	Squires, G.	3.3.25									
39	Stiff, J.	12.1.24	12.2.24	6.3.24	4.4.24	19.5.24	4.7.24	To Central School			
40	Swallow, E.										
41	Squate, B.	8.12.24	11.2.25								
42	Taylor, R.	1.4.24	6.5.24	2.6.24	14.7.24	11.9.24	1.10.24	18.10.24	11.11.24	18.12.24	12.1.25

The last named has entered his third contract and has already finished two of the assignments in that contract.

THE DALTON PLAN

21

(Source: A. J. Lynch, *The Rise and Progress of the Dalton Plan n*, George Philip & Son, 1926, p.21)

(Table 7) ドルトン・プラン採用校の学習時間の状況(1)

## 26 THE RISE AND PROGRESS OF

Subject.	Hours available.	Time for class work.	Time given to pupils.	Length of unit.
English . . . . .	5	—*	5	60 mins.
Literature . . . . .	5	I	4	48 ,,
Arithmetic . . . . .	4	I	3	36 ,,
Geography . . . . .	2	I	I	12 ,,
History . . . . .	2	I	I	12 ,,
Drawing and Science	2	I	I	12 ,,
Totals . . . . .	20	5	15	3 hrs.

(Source: A. J. Lynch, *The Rise and Progress of the Dalton Plan n*, George Philip & Son, 1926, p.26)

(Table 8) ドルトン・プラン採用校の学習進度表

20 THE RISE AND PROGRESS OF

FORM.							
Assignment.	I.	II.	III.	IV.	V.	VI.	Etc.
Name.	Started.	Started.	Started.	Started.	Started.	Started.	

(Source: A. J. Lynch, *The Rise and Progress of the Dalton Plan n*, George Philip & Son, 1926, p.20)

(Table 9) ドルトン・プラン採用校の学習時間の状況 (2)

Subject.	Hours available.	Time for class work.	Free study.	Unit.
English . . .	3	1 ½	1 ½	18 mins.
Arithmetic . . .	5	2	3	36 „
Geography . . .	1 ½	¾	¾	9 „
History . . .	1 ½	¾	¾	9 „
Drawing . . .	1	—	1	12 „
Totals . . .	12	5	7	1 hr. 24 mins.

(Source: A. J. Lynch, *The Rise and Progress of the Dalton Plan n*, George Philip & Son, 1926, p.28)

(Table 10) ドルトン・プラン採用校の学習時間の状況 (3)

Subject.	Hours available.	Time for class work.	Free study.	Unit.
English . . . .	3	1	2	24 mins.
Geography . . . .	2	1	1	12 „
History . . . .	2	1	1	12 „
Totals . . . .	7	3	4	48 „

(Source: A. J. Lynch, *The Rise and Progress of the Dalton Plan n*, George Philip & Son, 1926, p.28)

(Table 11) ドルトン・プラン採用校の学習時間の状況(4)

TIME SET.			
Subjects.	A day's work (1-unit basis).	A week's work (5-unit basis).	A month's work (20-unit basis).
English . . .	40	200	800
History . . .	45	225	900
Geography . . .	45	225	900
Mathematics . . .	30	150	600
Science or Nature Study . . .	20	100	400
<b>A month's job of 5 assignments</b>	<b>180 mins. or 3 hrs. daily</b>	<b>900 mins. or 15 hrs. a week's basis</b>	<b>3600 mins. or 60 hrs.</b>

(Source: A. J. Lynch, *The Rise and Progress of the Dalton Plan*, George Philip & Son, 1926, p.31)

- 注 -

- 1 たとえば、19世紀の基礎学校の校長の一日(午前6時から午後8時まで)の業務が、30分ごとの授業と5分刻みの雑務や行動の中で記されたものがある。See *School Management in Nineteen-century elementary schools*, in *History of Education*, History of Education Society, 1994, pp. 357-369.
- 2 ケンブリッジ大学教育学部のカニンガム氏(Peter Cunningham)への筆者のインタビュー(2006年11月5日)によれば、イギリスの専門性の歴史的源流は13-14世紀に遡り、専門性は宗教的文脈で捉えられていた。その後の1950年代までの期間をみれば、専門性は支配的的局面(dominant aspects)の観点から三つの時期に、すなわち、①教師資格登録に対する独立的な組織(independent organization for registration)、独自の雇用(independent body employment)、教師のステータス(teachers' status)(試験制度、賃金)が成立した時期、②公的サービスという点で、特別な理論的知識、哲学が形成され、革新的な見解(A. S. NeillやS. Isacsなど)が出現した時期、③科学的な学習(scientific learning)理論が形成され、思想・哲学ではなく、「いかに子どもは学ぶか」という心理学の確かな知識(convincing knowledge)が必要とされた時期、の三つに分けることができる。③の時期では、これを習得するとによって専門的な技術(professionalism)が育つとされた。
- 3 新教育運動の先行研究者であるイギリスのブレオニによれば、新教育運動期は、教師自らによる多様な実験が展開されたため、より確かなかたちで専門職意識が教師に形成された時代である。新教育連盟(New Education Fellowship)が教育学という学問領域に多大なる貢献を果たしたことについては、次の論考を参照。See Kevin J. Brehony, *A New Education for a New Era: The Contribution of the Conferences of the New Education Fellowship to the Disciplinary Field of Education 1921-1938*, *Pedagogica Historica*, Vol. 40. Nos. 5 & 6, Carfax Publishing, October 2004, pp. 733-755.
- 4 拙稿「教員養成とイギリス新教育運動—自律性による『教師の専門職化』の基盤/枠組み形成」平成14年度～平成16年度 科学研究費補助金(基盤研究C(1))報告書『新教育運動期における「教職の専門分化」と「教育学の制度化」に関する比較私的研究』(研究代表者 山崎洋子)、2007年3月、49-65頁。
- 5 ただ、様々な人々によって、様々な局面や角度から展開されたために、変革のベクトルは特定しがたく、また教育行為に関わっている教師らの内発的な改革要求も、一枚岩的なものではなかった。そのことは、新教育運動と称されたさまざまな組織の参画者の多様性にも示されている。
- 6 ピーター・カニンガム著、山崎洋子・木村裕三監訳『イギリスの初等学校カリキュラム改革—1945年以降の進歩主義的理想の普及』(つな出版、2006年)を参照。
- 7 橋本毅彦、栗山茂久編著『遅刻の誕生—近代日本における時間意識の形成』(三元社、2001年初版、2006年初版第9刷)を参照。
- 8 とはいえ、新教育運動は管理された時間概念が推進された時期である、と捉える見解も出てくる。これについては、次稿に譲る。
- 9 筆者は、この第I期をフォースター教育法(Elementary Education Act in 1870, Foster)成立、10歳までを義務教育にすることを提言したマンデラ教育法(Education Act in 1880, Mundella)成立、1895年の「出来高払い制」廃止、1899年教育院法(Board of Education Act)成立、1902年のバルフォア教育法(Education Act in 1902, Balfour)成立という歴史的な

- 出来事のあった時期で弁別している。
- 10 Before the Act of 1870 the Department had no power to force a school on any locality. (A. W. Newton, *The English Elementary School*, Longmans, 1919, p. 3 )
- 11 S. E. Bray, *School Organisation*, 1911, pp. 237-238.
- 12 John J. Prince, *School Management and Method, in theory and practice*, 1894(sixth edition), p. 20.
- 13 拙稿「J. J. フィンドレイのカリキュラム論—イギリス新教育運動における教師の専門性をめぐって—」武庫川女子大学編『武庫川女子大学紀要(人文・社会科学編)』第5巻, 2007, 21-30頁。
- 14 同上, 24頁。
- 15 同上, 27頁。
- 16 同上, 28頁。
- 17 Board of Education, *Special Reports of Educational Subjects*, Vol. 6, Preparatory Schools for Boys: Their Place in English Secondary Education, 1900, pp. 423-425.
- 18 ほぼ同等の能力を有する生徒を同じクラスに収容する実践的な方法は、ストリーミング(streaming)といい、教科ごとにグループで移動する場合はそれをセッティング(setting)という。D.ウォードル著, 岩本俊郎訳『イギリス民衆教育の展開』(協同出版, 1979年, 258-259頁)を参照。
- 19 J. J. Findlay, *Principles of Class Teaching*, (Macmillan's manuals for teachers / edited by Oscar Browning and S. S. F. Fletcher), Macmillan, 1902.
- 20 Ibid., pp. 13-14.
- 21 Ibid., pp. 174-175.
- 22 Ibid., pp. 174-175.
- 23 Ibid., pp. 174-175.
- 24 Ibid., pp. 174-175.
- 25 新教育運動第二世代とは, A. S. ニール, B. エンゾアらを指す。
- 26 J. J. Findlay, *The Demonstration School Record No. II, The Pursuits of the Fielden School*, Manchester, University Press, 1913.
- 27 彼の経歴は不明であるが, 彼は, ダブリンのトリニティ・カレッジ, カレッジの弁護士(Respondent of Trinity College, Dublin), 法廷弁護士(Barrister-at-law), ロンドン・カウンティ議会立学校の視学官(Inspector of Schools to London County Council), 『ブリタニアの国』の著者(Author of "Britannia's Realm,")である, と本書で紹介されている。
- 28 S. E. Bray, *School Organisation*, University Tutorial, 1911. 同名の著書は, 1905年(1<sup>st</sup> edition), 1914年(2<sup>nd</sup> edition), 1924年(3<sup>rd</sup> edition)に刊行されている。ここで使用した著作は, 第二版であり, それは改訂・拡大版である。そのため, 1910年教育法規についての言及も存在する。
- 29 1910年教育法規の第1条から第7条の精神を指す。
- 30 S. E. Bray, *School Organisation*, University Tutorial, 1911, pp. 230-231.
- 32 Ibid., p. 231.
- 32 Ibid., p.233
- 33 ブレイによれば, この箇所典拠は, シカゴの児童研究報告書(*Child Study Reports in connection with the Chicago Public Schools*)からである。
- 34 S. E. Bray, *School Organisation*, University Tutorial, 1911, p. 233.
- 35 彼の教育実践については, 後に勅任視学官・ジェラード・ホームズ(Maurice Gerard Holmes, 1885-1964. エドモンド・ホームズの息子)の著作『愚かな教師の校長オニール(*The Idiot Teacher-A Book about Prestolee School and Its Headmaster E. F. O'Neill*)』の中で, 国家の教育政策に対するアイロニーとともに紹介されている。
- また, 最近の研究論文には次のものがある。See Catherine Burke, 'The school without tears': E. F. O'Neill of Prestolee, *History of Education Society, History of Education*, Vo. 34 No. 3, Journal of the History of Education Society, Taylor & Francis, May 2005, pp. 263-275.
- 36 E. F. O'Neill, *Creative Education-Learning by Doing, Conference on New Ideals in Education*, 1919, p. 95.
- 37 拙稿「教員養成とイギリス新教育運動—自律性による『教師の専門職化』の基盤/枠組み形成」平成14年度~平成16年度 科学研究費補助金(基盤研究C(1)) 報告書『新教育運動期における「教職の専門分化」と「教育学の制度化」に関する比較的研究』(研究代表者 山崎洋子), 2007年3月, 49-65頁。
- 38 E. F. O'Neill, *Creative Education-Learning by Doing, Conference on New Ideals in Education*, 1919.
- 39 これは, 教育の新理想会議(Conference of New Ideals in Education, 3rd-10th Aug. 1921)を指す。
- 40 Helen Parkhurst, *The Dalton Laboratory Plan, Report of New Ideals in Education 1921 & 1922*, pp. 52-53.
- 41 宮本健市郎「ヘレン・パーカーストの教育思想の展開とイギリスにおけるドルトン・プランの変容」(『兵庫教育大学研究紀要』第20巻, 第一分冊, 2000, 21-32頁)を参照。
- 42 Roy Wake and Pennie Denton, *Bedales School*, Haggerston Press, 1993, pp. 82-3.
- 43 Conference of New Ideals in Education, 3rd-10th Aug. 1921, p. 144.
- 44 Education Adaptations in a Changing Society, held in Capetown and Johannesburg in July 1934, under the auspices of the NEW EDUCATION FELLOWSHIP
- 45 拙著『ニール「新教育」思想の研究—社会批判に基づく「自由学校」の地平』(大空社, 1996)を参照。
- 46 このような考えに生物学的視点を投入したのが, パーシー・ナン(P. Nunn)である。ナンは, 「新教育の基礎」の講演において, 生物学の諸概念と哲学的で宗教的な考えとの統合を主張した。拙著『ニール「新教育」思想の研究—社会批判にもとづく「自由学校」の地平—』(大空社, 1996年, 346頁)を参照。
- 47 Individual methods, in *Report of The Consultative Committee on The Primary School*, HMSO, 1931, p. 152. これは, 一般にハドー報告書と称されている。
- 48 Peter Gordon & Denis Lawton, *Timetabling*, in *Dictionary of British Education*, 2003, p. 248.
- 49 この点については, イギリス教育史研究の泰斗, ロイ・ロウ教授(Professor Roy Lowe, ロンドン大学教育研究所客員教授)の講演「近年のイギリスにおける教員養成の発展」(2008年3月8日, 武庫川女子大学教育研究所国際セミナー)の質疑応答においても示されたことを付言しておきたい。
- 50 Ron Brooks, *King Alfred School and Progressive*

*Movement, 1898-1998*, University of Wales Press, *ibid.*, pp. 94-5.

- 51 リンチは「教育の新理想」年次会議（Conference of New Ideals in Education 1923）においてドルトン・プランの応用について述べている（*Report of the Conference on New Ideals in Education, New Ideals in Education, 1923*）。この会議で使用されたデータは、*The Rise and Progress of the Dalton Plan*（1926）に再掲されているので、本論ではこの書物から引用する。